

夢を掘りあてた人

——トロイアを発掘したシュリーマン——

ヴィーゼ作 大塚勇三訳



岩波書店

289 ヴィーゼ, イング・フォン

夢を掘りあてた人 — トロイアを発掘したシュリーマン —
イング・フォン・ヴィーゼ作 大塚勇三訳

岩波書店 1969 年

314 p 23 cm 小学 5, 6 年以上

(参考) Wiese, Johanna Inge von : Das Griechische
Abenteuer, 1955.

夢を掘りあてた人

—— トロイアを発掘したシュリーマン ——

定価七〇〇円

一九六九年十月二十日 第一刷発行 ©
一九七〇年五月十五日 第二刷発行

訳者 大塚勇三

発行者 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社三水舎

表紙・箱・見返印刷 錦印刷株式会社

夢を掘りあてた人

——トロイアを発掘したシュリーマン

ヴィーゼ作 大塚勇三訳

岩波書店



DAS GRIECHISCHE ABENTEUER
— Das unerhörte Leben Heinrich Schliemanns —
by J. I. von Wiese
Copyright 1955 by J. I. von Wiese

Japanese translation rights arranged through
Bardenschlager Verlag GmbH., München and
E. Mecklenburg & Co., Tokyo.

もくじ



物語のまえに……………9

第一部 長い廻り道

1 ぼくはトロイアを掘りだすよ……………29

2 見習い小僧から船室給仕へ……………42

3 チャンス……………57

4 六か国語を話す青年……………63

5 セント・ペテルスブルグへ……………76

6 シェークスピア劇と大英博物館……………89

7 アメリカ市民ヘンリー・シュリーマン……………105

8 運命の顔……………123

9 ホメロスの国に近づく……………136

第二部 夢を掘りあてた人

1 ギリシアの太陽……………151

2 ようこそ、ヒツサルリクに……………160

3 ソフィアとともにトロイアへ……………170

4 巨人の城壁……………180

5	パリへ……………	189
6	壁に火のあとが……………	195
7	スカイア門……………	209
8	「プリアモスの宝」……………	221
9	ミューケーナイの「宝庫へ」……………	228
10	ギリシア人の監視役……………	234
11	アガメムノンの仮面……………	244
12	ふたたびトロイアへ……………	252
13	ドイツからきた教授……………	257
14	ベルリン名誉市民……………	270
15	故郷の村からティリュンスへ……………	277
16	たったひとりの死……………	299
	物語のあとで……………	303

日本の読者のみなさんに
訳者のことば

インゲ・フォン・ヴィーゼ…………… 307
大塚勇三…………… 309
さし絵 アルバン・ゲルナー＝カルフ

夢^{ゆめ}を掘^ほりあてた人

—— トロイアを発掘^{はつくわ}したシユリーマン ——

大^{おお}塚^{つか} 勇^{ゆう} 三^{ぞう} 訳^{やく} 作^{さく}
インゲ・フオン・ヴィーゼ



ものがたり
物語のまえに

この本は、神話のかなたにかすむ古代のギリシア世界にあこがれた人の物語です。ですから、あちこちに、ギリシア神話の神さまや英雄のことがでてきます。とりわけ、ギリシアの大詩人ホメロスのつくったという叙事詩「イーリアス」と「オデュッセイア」のことや、そこに語られているトロイア戦役のはなしは、どうしても欠くことのできないものになっています。そこで、そういう神話やホメロスの詩になじみがなかった人のため、この本を読むのにいるだけのあらましを、ここに書いておくことにしました。ですから、もうギリシア・ローマ神話などを読んで、知っているかたは、どうかここをとばして、まっすぐに物語にはいってください。

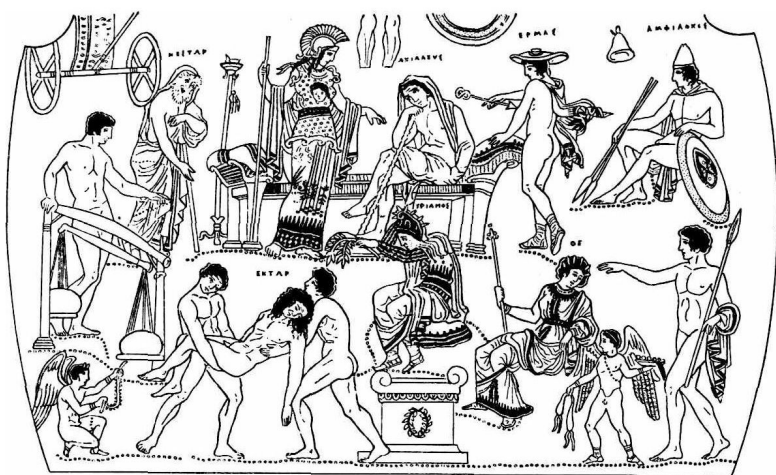
では、神話のあとをたどっていきましょう。

トロイア戦役のはじまり

十年にもわたるトロイア戦役は、もとはといえば、女神たちの争いからはじまりました。それは、こういうわけでした。

美しい海の女神テティスとペーレウスとの婚礼に、天上の神々も

物語のまえに



わが子ヘクトールの死体をうけとるプリアモス王。

まねかれて、にぎやかに祝宴をひらいていたときでした。

たったひとりまねかれなかった争いの女神エリスが、その

席へ黄金のリンゴをひとつ投げこみました。それには「い

ちばん美しい女神へ」と書いてあったのです。すぐ、女神

たちのあいだに争いがおこりました。なかでも、大神ゼウ

スの妃ヘーラーと、知恵をつかさどるアテナ、それと美の

女神アプロディテーの三人は、じぶんこそいちばん美しい

といひはりました。そして大神ゼウスは、これを判決する

役を、イーダー（イーデー）の峰で羊をかつている美少年パ

リスにまかせたのです。パリスは、小アジア西北部にある

トロイア地方の王、プリアモスの二ばん目のむすこで、

「神にも似た」美しい姿のもちぬしでした。

三人の女神は、トロイアの「泉にゆたかな」イーダー山

にでかけ、それぞれよそおいをこらして、パリスのまえに

あらわれましたが、それといっしょに、めいめい贈り物の

約束をして、パリスの心をひこうとしました。ヘーラーは

世界の支配権を、アテナはあらゆる戦いでの勝利を、そし

てアプロディテーは、この世でいちばんの美女をあたえようといいました。そしてパリスは、アプロディテーのさそいにのつて、黄金のリンゴをこの女神にあたえたのです。

パリスはアプロディテーのまじびきで、海をこえてギリシアに渡り、スパルタ王メネラオスの宮廷につきました。メネラオスの妃ヘレネこそ、世にもたぐいえない美女でしたが、女神は、このヘレネをパリスにあたえようときめたのです。やがて、愛の女神にたすけられたパリスは、メネラオスのるすにヘレネを誘惑し、夜にまぎれていっしょに船に乗りこみ、多くの財宝までも積みこんで、トロイアに逃げもどったのです。ギリシアの人びとと、トロイアの人びととの戦いは、これをきっかけにはじまりました。

ヘレネが奪われたと知ったメネラオスは、おどろき、怒って、すぐ国に帰り、ミュケーナイ王である兄のアガ멤ノンと相談すると、ヘレネや宝を返すよう、トロイア方かけあいました。しかし、トロイア方はこれをはねつけ、そこでメネラオスとアガ멤ノンのきょうだいは、ギリシアじゅうの君主や勇士に援軍をもとめ、やがてこれらの軍勢は、アウリスの浜に勢ぞろいしました。ほぼ十万のつわものと、船も千そうをこえる大軍でした。

このトロイア遠征軍の総大将はアガ멤ノンで、もちろんメネラオスも、その手勢をひきいていました。さらに主だった大將はといえば、まず、武勇ならびない若い英雄アキレウスがいます。彼は、あの海の女神テティスのむすこで、もし従軍すればかならず討ち死にするという運命をもっていたのですが、説きつけられて、この出陣に加わったのでした。また、西ギリシアのイタケー島の領主、「知謀に富んだ」オデュッセウスも、美しい妻ペネロペイアや、生まれたばかりのむすこテレマコスをあとのこして、この遠征に加わ

りました。さらに、アルゴスの王族ディオメデース、剛勇のアイアース、老将ネストールなど、えりぬきのつわものたちが、そろって戦に加わり、ギリシア軍は艦隊をつらねて、思わぬ災いや困難にあいながらも、ついにトロイアの浜べに近づきました。

しかしトロイア方も、じぶんの手勢や、まわりの同盟都市の軍勢をあつめて、戦いにそなえていました。ときのトロイア王プリアモスは、もう老人ではありましたが、よく領土をおさめ、その都城（イーリオスといひます）は富み榮えていました。ですが、トロイア勢の中心は、プリアモスの長男で、「きらめく兜の」とよばれるヘクトールです。彼は武勇にすぐれているばかりか、人となりもけだかい英雄でした。このほか主な大将には、アプロディテーの子で王族のアイネイアス、それにパリス、まわりの地方からパンダロスやサルペードーンなど、いずれも名だたる若武者が加わりました。

こうして、トロイアの浜についたギリシア勢と、まちうけたトロイア勢とは、楯をかざし槍をふるって戦いました。ついにトロイア方はおされて城にしりぞき、ギリシア軍は上陸して、浜べに陣をきました。そして両軍は、海岸と城とのあいだの平野や、そこを流れるスカンドロス川のはとりで戦いをくりかえしましたが、トロイアの城の守りはかたく、勝敗のきまらないまま、いつしか九年たちました。ギリシア軍はトロイアと戦うかたわら、まわりの町々を攻めて、人や物をうばったりしていました。ホメロスの「イーリアス」にうたわれているのは、このころのことです。

「イーリアス」

ギリシア軍のわざわいは、全軍をひきいるアガメムノンと、軍中第一の英雄アキレウスとの争いからおこりました。近くの町からうばつてきた捕虜のうち、アガメムノンのものとされたおとめのことで災いがおこり、そのおとめを父のもとに返すことになりましたが、アガメムノンはそのかわりに、アキレウスの陣にいた「頼美しい」おとめブリセイスをよこせといはったのです。アキレウスは、怒る心をやつとおさえて、承知はしましたものの、それと同時に、じぶんはもうこの戦いから手をひくと宣言して、陣にもどりました。彼は、波のうちよせるなぎさにいき、海原に手をさしのべて、母の女神テイスをよびだすと、じぶんの身の上をうったえました。わが子の不幸を怒ったテイスは、オリュンポス山にいた大神ゼウスをたずねて、どうかトロイア勢に加勢してください、そして、第一の勇士アキレウスをはずかしめたことをギリシア軍に後悔させてくださるように、とたのみました。ゼウスは承知しました。ゼウスはまず、アガメムノンにまちがった夢をみさせ、勝利はうたがいないと思ひこませて、合戦をしかけるようにさせました。

こうしてギリシア軍は、鎧兜をきらめかせ、はげしい戦意をむねにだいて、トロイアの平原におしだしました。トロイアの軍勢は、大空をわたるツルの群のように、かしましく喚声をあげて進みました。そして、パリスとメネラオスの一騎打ちをかわきりに、はげしい戦いがはじまりました。

天上の神々も、オリュンポス山からくだって、それぞれの味方につきましました。美しさの自信をけがされた

ヘーラーとアテナはもとより、海神ポセイドーン、鍛冶の神ヘーパイストスなどはギリシア軍に、そして美の女神アプロディテー、銀の弓をもつ青年神アポロン、軍神アレースなどはトロイア方に力をそえました。やがて大神ゼウスも、トロイアに近いイーダーの峰に座をしまして、戦場のもようを見まもらしました。

両軍の英雄たちは武勇をきそい、平原のここかしこではげしくせりあいましたが、トロイア勢はしだいにギリシア軍を追いつめました。その先頭には、兜をきらめかせた勇将ヘクトールがすすみます。ヘクトールは、彼の身を気づかってなげく妻のアンドロマケーをなだめ、「運命だけは、だれひとり逃れられないのだ。」といいのこし、死を決して、城のスカイア門から出陣してきたのでした。こうしてついにギリシア軍は平原から追われ、海岸のせまい陣地に追いこまれました。

ギリシアの大將たちは、あのアキレウスさえいてくれたらと、心から思いました。オデュッセウスらがアガ멤ノンにかわつてわびをいい、戦場に出てほしいとたのみましたが、アキレウスは、冷たく、きびしくはねつけました。そして、神々の助けやオデュッセウスらの奮戦のいかにもなく、ギリシア軍はさらに圧迫され、もう陣地も破られて、一そうの船には火がかけられました。ギリシア軍の敗北はもう定まったかとみえました。

アキレウスの親友パトロクロスは、ギリシア軍の破滅を、とても見すごしていられませんでした。彼はアキレウスにたのみこんで、名高いアキレウスの武器をかりて、じぶんの身につけ、アキレウスの部下である強い部隊をひきいて、戦場につっこんでいきました。

おそろしいアキレウスの鎧を着たその姿を見るなり、トロイア軍はおそれおののき、どつと逃げだしました。戦いのようすは、たちまち変わりました。勢いにのるパトロクロスは、するどい槍をふるい、どこまでも追撃しました。深追いするなという、アキレウスの忠告も忘れはてていました。それは彼の運命でした。このとき、アポロンにはげまされたヘクトールは、馬車をかって、パトロクロスにおそいかりました。やがて二頭のライオンのようにむきあつたふたりは、乱戦のうちでたたかいましたが、ついにパトロクロスは、ヘクトールの青銅の槍のひと刺しに、若い生命をおとしました。

したしい友の死をきいたアキレウスは、声をはなつてなげき、あだを討つことをちかいました。ヘクトールを殺せば、おまえもやがて死ぬ、と母のテティスにとめられても、もはやその運命もおそれませんでした。彼はテティスにたのみ、その夜のうちに、すばらしい物具をヘーパイストス神につくってもらうと、あくる朝はやく、それを身につけて、ギリシアの大將たちをあつめました。彼はアガ멤ノンと和解して、出陣の決意をつけ、やがてギリシア軍の先頭を、戦場へと進みました。

いかりにもえるアキレウスに、はむかえるものではありません。アキレウスはトロイア方の大將をつぎつぎにたおし、八方にあれまわつて、トロイア勢をイナゴの群のように追いたて、殺し、ヘクトールをさがし求めながら、トロイアの城にせまりました。城壁の上からこれをながめた老王プリアモスは、いそいで城門をひらかせ、みかたを城内に入れたのですが、ヘクトールだけは、ただひとり、城門のまえでまちうけていました。

物語のまえに